

十九世紀英国における国立科学学校の

設立と発展

——政府立鉱山・応用科学学校からロイヤル
科学学校・ロイヤル鉱山学校へ(一)——

広瀬 信

一 はじめに

一八五一年に設立された「政府立鉱山・応用科学学校」は、後に「ロンドン市同業組合協会中央技術カレッジ」(一八八四年設立)とともに、英国の中核的高等科学技術教育機関である「インペリアル科学技術カレッジ」(一九〇七年設立)の母体となった英国技術教育史上重要な教育機関である。同校はまた、レッセ・フェールの原則の下で政府は高等教育に直接関与しないのを建前とした十九世紀に、一八五一年から一九〇七年の半世紀余りの期間、政府によって設立、維持された国立の高等科学技術教育機関であったという点においても「ユニーク」な存在であった。

同校はこの間、一八五三年には「鉱業および他の諸技芸への応用のための首都科学学校」、一八五九年には再び政府立鉱山・応用科学学校、一八六三年には「ロイヤル鉱山学校」、一八八一年には「科学師範学校・ロイヤル鉱山学校」、一八九〇年には「ロイヤル科学カレッジ・ロイヤル鉱山学校」と校名の変更を繰り返している。

この頻繁な校名変更からもうかがえるように、同校の性格はこの間一貫していたわけではなかった。もともとは鉱山専門学校と

して設立されたわけだが、その設立の年が英国の科学技術教育政策に大きなインパクトを与えたロンドン万国博覧会が開催された年であったということもあって、当初から学校の性格をめぐる考え方の対立が存在した。そして両者の対立、抗争を通じて、同校は、当初の鉱山専門学校から総合科学学校へと発展していったのであった。

わが国では、同校そのものを対象とした研究としては、その設立の背景を検討した角替弘志氏の「王立鉱山学校成立前史」しかなく、同校の性格変化の経緯については十分明らかにされていない。本発表では、その性格変化に焦点をあてながら、同校の設立、発展の経緯を明らかにしたい。

二 設立前史(一八三二—一八五一年)

政府立鉱山・応用科学学校の設立は、地質学者H・デラ・ベッシュに負うところが大きい。一八三二年に陸軍の陸地測量部作成の地図に地質分布の着色をする許可を得た彼は、三四年に陸軍軍需局に地質調査所を設立することに成功する。これとは別に、彼は三七年、産業用の鉱物の標本を集め、教育用に展示するために、森林・事業局に経済地質学博物館を設立することにも成功し、付属の実験室で化学、冶金学、鉱山学の教育も始める。四〇年には、同博物館内に鉱山記録所も設立される。四四年に地質調査所が森林・事業局に移管され、これによって三つの施設が博物館の建物に統合されることになった。

このころにはスタッフも充実し、後に政府立鉱山・応用科学学校の最初のスタッフになる面々がほぼ顔をそろえている。かれらは指導者デラ・ベッシュと堅い絆で結ばれ、後に学校の性格をめ

ぐる路線上の対立が生じた時、一方のグループを形成することに
なる。

一八五〇年、これまでの博物館が手狭になったので新しく実用地質学博物館が設立された。デラ・ベッシュは博物館の拡張に合
わせて鉱山学校の設立を構想した。この構想と呼応して全国の鉱
山地域から政府に寄せられた鉱山学校の設立を訴える陳情書の力
もあって、一八五一年、政府立鉱山・応用科学学校が設立される
ことになった。

三 第一期 専門学校の時代

(一八五一年～一八八〇年)

(1) 前期 一八六三年の校名変更まで

政府立鉱山・応用科学学校は、先に指摘したように地質調査所
時代からのスタッフをほぼそのまま引き継いだスタッフで出発し
た。同校は、その設立経過からも推し量れるように、専門学校と
しての性格をもっていた。一八五二年の最初の学校案内の教育目
的規定が示しているように、それは鉱業その他の職業実務に入る
準備のための専門教育を与えることをその主要目的としていた。

他方、同校が設立された一九五一年、ロンドンで第一回万国博
覧会が開催され、これを契機に、デラ・ベッシュらの動きとは別
に、産業教育機関の設立を求める世論が高まった。博覧会委員会

委員長のアルバート殿下は博覧会の剰余金を使った産業教育振興
構想を立て、それを踏まえて、一八五二年、博覧会委員会は剰余
金で、そこを科学技芸教育の一大センターにするべく、サウスケ
ンジントンに広大な土地を購入することを決定した。一八五三年、
商務院に科学技芸局が設置され、政府立鉱山・応用科学学校は同
局へ移管されるとともに、「鉱業および他の諸技芸への応用のた
めの首都科学学校」と校名が変更された。校名変更とともに同校
は、科学教育の中の一つの特定の部門のために設立された学校か
ら、将来的にはあらゆる産業科学が教えられることになる中央総
合科学学校へと位置付けが変えられ、学校案内からも専門学校と
しての性格規定が外された。しかし、スタッフは地質調査所以来
の人脈が大勢を占めたままで、かれらは創設時の性格を守ろうと
し、鉱山専門学校派を形成した。

一八五五年、死亡したデラ・ベッシュの後任人事をめぐって、
アルバート殿下を中心とする総合科学学校派と鉱山専門学校派と
の最初の角逐が起こった。結果的には鉱山専門学校派が勝利し、
地質学者のR・マーチソンが後任となった。

マーチソンの下で、創設時の鉱山専門学校としての性格を再び
明確にしようとする動きが強まり、一八六三年、「国立鉱山学校
であることを明確にするために」、「ロイヤル鉱山学校」と改称さ
れた。これによって鉱山専門学校としての性格が一応確立された。